

## SGLT2 阻害薬が試験紙法による尿蛋白定性に与える影響について

◎塚本 美和子<sup>1)</sup>、赤木 征宏<sup>1)</sup>、團野 恭子<sup>1)</sup>、吉田 潤子<sup>1)</sup>  
社会医療法人 警和会 大阪警察病院<sup>1)</sup>

【はじめに】試験紙法による尿蛋白定性は、スクリーニング検査として広く実施されている。又、糖尿病の治療薬である SGLT2 阻害薬は、その副作用の 1 つに利尿作用による脱水があげられる。SGLT2 阻害薬の投与により、尿量増加に伴う尿中成分の濃度低下が、尿蛋白定性に影響を与える可能性があると思われ。そこで、尿蛋白定性と尿蛋白/クレアチニン比 (P/C 比) を用いて、SGLT2 阻害薬が尿蛋白定性に与える影響について検討した。

【対象と方法】2023 年 1 月から 2 月に当院糖尿病内分泌内科外来を受診し、尿蛋白定性、P/C 比の検査依頼があった 547 件を対象とした。尿蛋白定性が陰性 (25mg/dL 未満) かつ P/C 比が陽性 (0.15g/gCr 以上) の検体を乖離検体とし、その数を非糖尿病患者 (非 DM 群)、糖尿病患者かつ SGLT2 阻害薬の非投与患者 (DM SGLT2 阻害薬非投与群)、糖尿病患者かつ SGLT2 阻害薬の投与患者 (DM SGLT2 阻害薬投与群) の 3 群に分けて比較検討した。

【結果】非 DM 群は、51 件中 14 件 (27.5%)、DM SGLT2 阻害薬投与群は、194 件中 68 件 (35.0%)、DM

SGLT2 阻害薬非投与群は、302 件中 137 件 (45.0%) の乖離が認められた。DM SGLT2 阻害薬非投与群は、非 DM 群や DM SGLT2 阻害薬投与群に対して有意差 ( $p<0.05$ ) が認められた。

【考察】非 DM 群と DM SGLT2 阻害薬投与群とでは、尿蛋白定性と P/C 比の乖離検体数に有意差 ( $p<0.05$ ) は認められなかった。しかし、DM SGLT2 阻害薬非投与群は、他の 2 群に対し、尿蛋白定性と P/C 比の乖離検体数が有意に増加していた。これにより、糖尿病かつ SGLT2 阻害薬を投与されていないことが、尿蛋白定性と P/C 比の乖離検体数の増加に影響することが示唆された。

【結語】糖尿病かつ SGLT2 阻害薬投与患者の尿では、尿蛋白定性と P/C 比に乖離検体がみられたものの、検討により、SGLT2 阻害薬の投与は、尿蛋白定性に影響を与えている可能性は低いと考えられた。DM SGLT2 阻害薬非投与群の乖離原因に関しては、追加検討の必要性があると考えられた。

連絡先 06-6771-6051(内線 2257)